

各関係機関・団体長 様

愛媛県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

このことについて、9月の予察情報を送付します。

病虫害発生予報（9月）

令和5年8月31日
愛 媛 県

1 気象予報（高松地方气象台）

1か月予報（令和5年8月24日発表）の解説

向こう1か月の天候の見通し 四国地方（8月26日～9月25日）

【1か月の平均気温・降水量・日照時間】

	平均気温（1か月）	降水量（1か月）	日照時間（1か月）
四国地方	低 10 並 20 高 70% 高い見込み	少 20 並 40 多 40% 平年並か多い見込み	少 40 並 40 多 20% 平年並か少ない見込み

【予報のポイント】

- ・暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。
- ・期間の前半を中心に湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

2 病虫害の発生予想

水 稲

(1) いもち病（穂いもち）

（令和5年8月17日付 病虫害防除技術情報（第3号）参照）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査（普通期栽培）では、地域によって差はあるが、平年並の発生である。

(イ) 8月の広域調査（8月24日現在：早期・普通期）では、発生程度の高い圃場も認められているが、平年並の状況である。

(ウ) 8月1日～23日までのBLASTAMによる葉いもち感染好適条件出現の判定では、感染好適日が15日と18日に1地点（同一地点）で認められたが、それ以外の地点では感染好適日は出現していない（病虫害防除所ホームページ掲載データ参照）。

(エ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多い、日照時間は平年並か少ないとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 葉いもちの発生が上位3葉まで認められる圃場では、出穂期防除は必ず実施する。さらに、出穂後に天候不順が続く場合には、出穂10～15日後の仕上げ防除時に、本病に効果のある薬剤を追加する。

(2) 紋枯病

（令和5年8月17日付 病虫害防除技術情報（第3号）参照）

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査（普通期栽培）では、平年並の発生であるが、上位進展している圃場も認められる。

(イ) 8月の広域調査（同）では、平年並の状況である。

(ウ) 普通期栽培の茎数は、ほぼ平年並である。

(エ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 出穂後は株内湿度が高まりやすいので、発病状況を観察し、上位進展が認められる場合には早めに追加防除を実施する。
- (イ) 止葉から下位3葉の葉鞘に病斑を生じると収量に影響する。
- (ウ) 薬剤防除は、薬剤が株元まで到達するよう丁寧に行う。

(3) トビイロウンカ

(令和5年8月17日付 病害虫防除技術情報(第3号)参照)

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

- (ア) 8月中旬の定点調査では、早期栽培、普通期栽培ともに発生を確認していない。
- (イ) 8月の広域調査(同)では、成虫(長翅：南予1圃場、短翅：中予2圃場)および幼虫(中予1圃場)の発生を確認しているが、やや少の状況である。
- (ウ) 県下6か所に設置している予察灯では、7月1日に愛南町で飛来を初確認(1頭)したが、それ以降は、各地点とも8月第4半旬まで未確認である(病害虫防除所ホームページ掲載データ参照)。
- (エ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 出穂期防除は必ず実施する。
- (イ) 本虫は株元に寄生し、特に高温年には短期間に密度が高まり、収穫前に坪枯れを引き起こすことがあるため、下葉の枯死や田面の黄変などに注意する。
- (ウ) 8月中旬から下旬の要防除密度(10株当たり払落し虫数)は、10株当たり成幼虫数が30～50頭である。この密度に達した圃場では9月中旬以降に坪枯れの恐れがあるので、定期防除は必ず実施し、その後の発生動向に注意を払う。

(4) 斑点米カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 8月中旬の定点調査(普通期栽培)では、本田での発生圃場率はやや多であるが、掬取り虫数は平年並である。畦畔雑草の掬取り虫数はやや少、発生地点率は平年並である。
- (イ) 斑点米カメムシ類の主要発生種は、本田ではホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、畦畔雑草ではホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、アカスジカスミカメである。近年は、イネカメムシの発生が増加傾向にある。

(令和4年9月7日付 病害虫防除技術情報(第7号)参照)

- (ウ) 8月(1～4半旬)の予察灯によるミナミアオカメムシの誘殺数は、西予で平年より多く、松前でやや多であるが、その他の地点では平年並～少で推移している(病害虫防除所ホームページ掲載データ参照)。
- (エ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 要防除密度(本田乳熟期の捕虫網による20回掬取り虫数)は、大型種は1頭、小型種は3頭である。
- (イ) 水稻の依存性が高いミナミアオカメムシ、クモヘリカメムシは本田内で繁殖するため、出穂以降も圃場観察に努め、発生を確認した場合は早急に防除を実施する。
- (ウ) 防除は地域の防除指針に基づき、乳熟期～糊熟期(出穂期から10～15日)を目安に実施する。なお、その後も多発する場合は、薬剤の収穫前日数を遵守しながら、7～10日後に追加防除を実施する。

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 8月中旬の定点調査では、葉の発生は発病葉率が平年並、発病度が多、果実の発生は発病果率、発病度ともに平年並である。
- (イ) 気象予報では、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 発病果や発病枝葉は早期に除去し、園内の病原菌密度の低下を図る。
- (イ) 強風により付傷すると発病が助長されるので、台風襲来前後の薬剤散布や防風対策を講じる。
- (ウ) ミカンハモグリガの食害痕は病原細菌の侵入箇所となるので、夏秋梢の除去、防除を徹底する。

(2) 黒点病

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の調査では、やや少の発生である。

(イ) 気象予報では、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 枯死枝は早期に除去し、園外で適切に処分する。

(イ) マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は、累積降水量が200～250mm（または散布後30日）に達した時である。ただし、本病に対して罹病性が高い品種（せとか、河内晩柑、清見等）の散布間隔は、累積降水量約180mm（または散布後25日）とする。

(ウ) 年内に収穫する品種では、収穫時期を考慮して薬剤を選択する。

(3) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査では、寄生葉率はやや少、1葉当たり雌成虫数は平年並である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 園内の早期多発樹で、1葉当たりの雌成虫が平均2～3頭に達した時期が防除の目安となる。

(イ) 秋季は果実や葉裏への寄生が増加するので、薬剤はかけむらのないよう丁寧に散布する。

(4) ミカンサビダニ

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査では、やや少の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 被害果はその後の発生源となるため、早期に除去し、適切に処分する。

(イ) 被害は局所的に発生しやすいので、園地観察を丁寧にを行い、発生を確認したら早急に防除する。

(ウ) 高温乾燥条件が続く場合は、10月頃まで加害が継続するので注意する。

か き

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査では、果実の発生はやや少である。

(イ) 気象予報では、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地観察に努め、発病枝及び発病果実は早期に除去し、園外で適切に処分する。

(イ) 果実の感受性が高まる時期となるので、常発地では定期防除に努め、天候不順が続けば追加防除を実施する。

(2) うどんこ病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 気温の低下とともに葉裏に白色粉状の菌叢を生じてくるので、防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

果樹共通（かんきつ、かき、なし、キウイフルーツ）

(1) 果樹カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 8月（1～4半旬）の予察灯による誘殺数は、愛南では平年並であるが、それ以外の地点では少である。なお、愛南、吉田ではクサギカメムシが多い傾向である（病虫害防除所ホームページ掲載データ参照）。

- (イ) 8月(1～4半旬)の集合フェロモントラップによる誘殺数は、5地点とも少である(病害虫防除所ホームページ掲載データ参照)。
- (ウ) 県内11地点(8月中旬調査)のヒノキ球果の結実量が多い(下表参照)。
- (エ) ヒノキ球果のカメムシ類寄生虫数調査(10回掬い取り)では、平均捕獲虫数は1.0頭/地点であり、平年(2.3頭)に比べ少ない(下表参照)。
- (オ) 山林からの離脱の目安となるヒノキ球果の口針鞘数は、0.9個/球果(平年6.8個)であり、過去10年と比べて最も少ない。また、新成虫がヒノキを離脱する25個/球果に達している地点はない(下表参照)。
- (カ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられるが、球果の結実量が多く、虫数及び口針鞘数が少ないことから、新成虫の園地への飛来時期は遅くなることが予想される。

ウ 防除上の注意

- (ア) ヒノキ球果量の多い地域では、今後の飛来が多くなることも予想されるので注意する。
- (イ) 飛来は地域、園地により偏ることがあるため、園地観察に努め、飛来初期に防除を行う。
- (ウ) 台風等の通過後、一時的に果樹園へ飛来する場合がありますので注意する。
- (エ) 収穫期が間近となる果樹では薬剤の選択に注意する。

表 ヒノキ球果調査結果(2023年8月中旬調査)

調査地	結実量	10回すくい取り虫数							口針鞘数/ ヒノキ1球果
		チャバネアオ		ツヤアオ		クサギ		合計	
		成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		
新居浜市船木	多	0	0	0	0	0	0	0	1.4
西条市丹原町田滝	中	0	0	0	0	0	0	0	0.3
今治市大西町脇	やや多	5	0	0	0	1	0	6	5.7
松山市立岩	極多	0	0	0	0	0	0	0	0.7
松山市菅沢	極多	0	0	0	0	1	0	1	1.6
松山市久谷	多	0	0	0	0	0	1	1	0.1
久万高原町明神	やや多	0	0	0	0	0	0	0	0.0
内子町五十崎	極多	0	0	0	0	0	0	0	0.0
西予市城川町土居	多	0	1	0	0	0	0	1	0.1
西予市宇和町西山田	極多	0	2	0	0	0	0	2	0.1
愛南町城辺緑	極多	0	0	0	0	0	0	0	0.0
虫数平均(R5)		0.5	0.3	0.0	0.0	0.2	0.1	1.0	0.9
平年値(H25～R4)		1.5	0.7	0.1	0.0	0.1	0.0	2.3	6.8
今年の順位(H25～R4)		8	8	8	6	2	1	8	11

野菜

(1) 黄化えそ病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量: 並

イ 予報の根拠

- (ア) 8月中旬の定点調査では、平年並の発生である。
- (イ) 8月中旬の定点調査では、媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生は少である。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 発病株は直ちに抜き取り、適切に処分する。
- (イ) 発生圃場の栽培を終了する場合は、きゅうりの株元を切断して枯死させ、保毒虫が長期間残存しないようにする(施設栽培圃場が近隣にある場合は、株元切断前にミナミキイロアザミウマに有効な薬剤を散布し、保毒虫の拡散防止に努めるなど地域ぐるみで対策を実施する)。
- (ウ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が悪いため、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。
- (エ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。

- (2) 炭疽病（夏秋きゅうり）
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 8月中旬の定点調査では、平年並の発生である。
 - (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 草勢低下、窒素質肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
 - (イ) 老化葉や発病葉は早めに除去し、適切に処分する。
 - (ウ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- (3) 褐斑病（夏秋きゅうり）
- ア 予報の内容 発生量：多
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 8月中旬の定点調査では、多の発生である。
 - (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 草勢低下、窒素質肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
 - (イ) 老化葉や発病葉は早めに除去し、適切に処分する。
 - (ウ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- (4) ベと病（夏秋きゅうり）
- ア 予報の内容 発生量：やや少
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 8月中旬の定点調査では、少の発生である。
 - (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 成り疲れ、肥切れは発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
 - (イ) 老化葉や発病葉は早めに除去し、適切に処分する。
 - (ウ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- (5) 炭疽病（いちご）
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 8月中・下旬の定点及び広域調査（育苗床）では、平年並の発生である。
 - (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多いとされており、発生にやや助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 葉柄や小葉にわずかでも病斑が見られる株や萎凋株は徹底して直ちに除去し、感染源を圃場外に持ち出し、適切に処分する。
 - (イ) 不要な下位葉や古葉は除去し、株内の湿度を下げる。
 - (ウ) 雨滴や灌水の飛沫とともに胞子が飛散するので、灌水時には水滴が跳ね上がらないよう注意を払う。また、夕方遅くの灌水は避ける。
 - (エ) 過繁茂にならないよう追肥量に注意する。
 - (オ) 発病してからでは防除効果が劣るので、定期的な薬剤防除に努め、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。特に、降雨後に被害が拡大するので、降雨前の防除を徹底する。また、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
- (6) アブラムシ類（いちご、さといも、夏秋野菜全般）
- ア 予報の内容 発生量：やや多～多
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 8月中旬の定点調査では、いちご育苗床、さといもで多、夏秋きゅうりでやや多、夏秋トマトで平年並、夏秋なすで少の発生である。
 - (イ) 8月（1～4半旬）の黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺数は、少～やや少で推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データ参照）。
 - (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。

- (7) ハダニ類 (いちご、さといも、夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 8月中旬の定点調査では、いちご育苗床、夏秋なすでやや多、さといもで平年並の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。
- (イ) 同一薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
- (ウ) ハダニ類は雑草でも繁殖するので、圃場内外の除草に努める。
- (8) ハスモンヨトウ (いちご、さといも、大豆、夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 8月中旬の定点調査では、さといもの食害面積率はやや少、寄生虫数/20葉は平年並である。また、いちご育苗床では少の発生である。
- (イ) 8月(1～4半旬)の性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は、7地点中3地点でやや多～多、1地点で平年並、3地点でやや少～少で推移している。(病虫害防除所ホームページ掲載データ参照)。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。
- (イ) ふ化～若齢幼虫の分散前の加害葉(大豆では白変葉)の除去に努める。
- (9) オオタバコガ (夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 8月中旬の定点調査では、夏秋トマト(タバコガ類)で平年並の発生である。
- (イ) 8月(1～4半旬)の性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は、5地点中1地点で多、1地点で平年並、3地点でやや少～少で推移している。なお、松前町のトラップでは増加傾向である(病虫害防除所ホームページの調査データ参照)。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。
- (10) シロイチモジヨトウ (夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 8月(1～4半旬)の性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は、5地点中2地点でやや多～多、3地点で平年並で推移している(病虫害防除所ホームページの調査データ参照)。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か多いとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

【病虫害発生予察情報・各種調査データ】

愛媛県病虫害防除所ホームページでご覧になれます。

ホーム > 仕事・産業・観光 > 農業 > 鳥獣害・病虫害対策 > 愛媛県病虫害防除所
ホームページアドレスは <http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyubojo/index.html>

【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病虫害等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。
- ◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。